



Title	国民社会の研究 第25巻
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Issue Date	1963-02-03
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/77526">http://hdl.handle.net/2115/77526</a>
Type	manuscript
Note	『鈴木栄太郎著作集7(国民社会学原理ノート)』を出版した際のソースとなった原稿である(同書内での言及による)。
File Information	1028_0143.pdf



[Instructions for use](#)

NOTE BOOK

45

國民社會の研究

新物  
古  
人  
心  
の  
記  
念  
の  
交  
流  
誌  
録  
P. 117

第二十五卷

昭和十九年八月一日

SS  
T  
60

6  
V

凶犯は悪の道及には徹底的であらうか、  
善の新しき見と見ぬふりのところには法  
治の不備が有してこの通り 然るべき

今夜逃亡者と疑ふところを映画として

を見ても感ぜざらうか、逃亡者が偶

然にバスの大出火の件から乗客十餘人を

救ひ出したので、その逃亡者は町の裏

取として大急ぎで移向に出た。その裏取の

手裏剣を以て彼は殺人犯の逃亡者には違

いなくと殺人犯が居たりし新橋河の

人達が驚かおかしと云く彼を捕まへ

警署へ留置場に入れられた。指紋を重考

して見ると此を去りしものと被認したから

である。

ハスの火出火の付救あされ夫人の中は彼を  
留置しを保安官の保安官の子供を  
其の保安官の奥には子供の命の預り  
し<sup>犯人は</sup>成程の預りを成し<sup>た</sup>た<sup>る</sup>。逃之者<sup>は</sup>命  
之前神の誓し守り送り<sup>た</sup>た<sup>る</sup>。直前にハス  
の火災の扱け<sup>り</sup>を<sup>人</sup>は保安官の由。  
しを得<sup>て</sup>皆<sup>を</sup>留置場<sup>に</sup>留<sup>め</sup>て<sup>つ</sup>た<sup>る</sup>。握<sup>り</sup>  
を一人ニ<sup>と</sup>す<sup>る</sup>可<sup>が</sup>も<sup>た</sup>ず<sup>た</sup>。その握<sup>り</sup>  
の際に保安官の奥に<sup>て</sup>留置場<sup>の</sup>かき  
と<sup>と</sup>す<sup>た</sup>。犯人<sup>は</sup>泣<sup>き</sup>た。涙<sup>の</sup>心<sup>が</sup>た<sup>る</sup>。  
オ<sup>キ</sup>も<sup>と</sup>犯人<sup>は</sup>泣<sup>き</sup>た。泣<sup>き</sup>た。泣<sup>き</sup>た。  
両<sup>の</sup>逃<sup>れ</sup>その振<sup>り</sup>も<sup>と</sup>泣<sup>き</sup>た。泣<sup>き</sup>た。泣<sup>き</sup>た。

柳

若の語まところを固くと彼は多量の罪に

つゝ犯人となり死刑囚とされつゝいふもの

様である。お互の何れにしてを憐れんは罪

の過及要人の処は行はずが之様には

度を期すが兼ふれ対し恩義に對し

しは見え見えふより然るを亦す。保安官

の貞節は受け方思に對し是す。御恩

の感懐を在秘する。おまゝが保安官

官も自分の子供を救ふし。世に云々

は或しつゝの存たつた。はれと保安

官としての廉潔と返恩と兼ふれ對す

子善堂の御恩を亦たす。はれと保安

3

して保安官の仕事は之れを先ずする  
を強要し、<sup>他者に</sup>四種の違反、<sup>非</sup>法令の犯罪  
に就しては格別の罰則に処罰する事に徹  
底的であるところに、<sup>制裁</sup>法治の精神の  
中にもかかわらず、<sup>不自然</sup>不自然の裏に於いては  
種々ある。保安官の職務のあの思ひ  
却る行為は、<sup>自然</sup>この不自然の裏に於いては  
しるす保下、法治の組織について根本的  
に考えさせようとするが、  
人は悪く対して同様に善く対して、<sup>強い</sup>  
同様にしつゝ、仇に對してより同様に  
思ふに對しては多量に保下を強要する。

法律門では因人や兼子中ついでに金銀  
比多國へであつたころに根本的を不備  
がある。

日家は

でも

都上層が人の罪をいふなすかものも思出  
おありしていふと同様にいふ人を善く  
おとんを思ふれ思出おさなう様な  
看破の機同を他方に備へておく  
可いであらう。

今の但貴物家の格を血の気の公へ  
形式的に止めては役の立たぬ。先の保  
官の皇孫も満是す。格を制するに  
いふはなむ。

八一、

5-

古今東西の政治觀は政治が道徳の基  
礎の上にあるべきことを認めないものは  
ない。国民の命や平安の尊重が  
不可を認めぬものもない。功利説の原  
理が近代法の指道を示すのである。後  
叙決の原理は近代国家の國家の原  
則である。  
けれども現に首より定まり、米 概か柔工は  
る。一現在の日本の政治家や官吏の  
行動は是れを以ては程遠い。



#二、これは才二割の  
交流のついでに、  
即ち世界の  
一階級は、  
てあ、か、  
てあ、か、

人の生活の事情にまは

人と人が協力をし、  
一人の力の助け  
てあ、か、  
てあ、か、

物と人との社会的交流の意義

物の社会的交流は集落間に物の

過不及をなからしめ、社会内の

各物に対する合理的知覚不足の

人の社会的交流は、集落間に

人の知力又は労働力の過不及を

打ち消し、社会内の及限

ある人々に知覚不足の

あるもの、又は知覚不足の活用

心の社会的交流は、社会内の

又又、これは、人の知覚不足の活用

の集落間に、社会内の活用を意味する

ものである。必要を述べた場合、

7

協力は四段の演習。次の如き。事例によらざるものがある。  
 甲は彼の戦場に乙を兼任の形に入れた。  
 バイトさせたい。乙は彼の戦場に甲を  
 兼任の形に入れた。バイトさせたい。甲と  
 乙は互いにアルバイトの仕事をする。あるいは  
 バイトして、甲は乙の力を助ける。甲は乙の力を助ける。甲は乙の力を助ける。  
 協力は四段の演習。次の如き。事例によらざるものがある。  
 甲は彼の戦場に乙を兼任の形に入れた。  
 バイトさせたい。乙は彼の戦場に甲を  
 兼任の形に入れた。バイトさせたい。甲と  
 乙は互いにアルバイトの仕事をする。あるいは  
 バイトして、甲は乙の力を助ける。甲は乙の力を助ける。甲は乙の力を助ける。

過尤を告げ、場合、服えんりす、場  
 合、深ほんとする。場合、それは人の経験  
 又は文化のあらはれ、いつのころ、いつのころ、  
 あ、か、物や人から、これも希死する  
 あ、か、心の社会的変遷があったは、い、や、  
 物や人から、社会的変遷は、可能である。

# 実験的作法

誰れでもかどく下すも容易くはなぬ  
可なりかゝる事の子の出来に客観的の使  
の軌跡を私は言ひしと実験的作法  
とて用ひし。大衆の人の助力を得  
るに先んじて其の軌跡を必要の  
しるべき法の適用が非常の速さ  
に下りてあり。一すなはち用ひしとい  
は操作が困難な事、作法をいふ  
かつかしの教本や機械を必要とし  
りおろかり、技術が伴つた事、作  
用いぬ。辞書等もあつてよく、  
漢山の録目や一寸破格か、  
9

又、初めにこの二は調査しなつた  
記述的交流状況の調査として、一人の  
調査が、かつくやれば、誰でもその程  
困難な中に調査し得る、客観的  
な調査調査す。人々人々の心の内  
のやりとりをなすは、心理学者が  
内省的に、多岐の調査原理によ  
り、或る程度、観察法、出来事の下  
あう方が、その正しさを調査す。ヤ  
大年は、出で、心理学的に示す、心  
のあり、大か、心理学的現象  
に、その正しさを客観的に示す

さねていた。つうすかあまのて、私に在  
業も仕方此をさけて客観的に執筆  
し得る人の修飾の執筆や別友  
の上に看取りのさうにつとめていよ。  
此存の流執筆の写影的の字  
究中執筆のよるが此によつて相  
為と確に又相ある深心の此  
を知りてかあまよ。

私に在りて、集団の思想の上  
に此の構造を見よ。そのよるんを客観  
的執筆のためある。その定規調を  
よるんよるが調を有る執筆

この比喩のみならず、心理学的調査を  
され、能率と素直さを、試すのも、高  
等数学の適用をさげものも、政治と  
身辺経済の弊害をえんえんとのも  
皆、実験的の循環のためならず、總  
て、能率者は、自己の力に下りた  
下りしの間隙もなく味讀ませ  
よのて、なくはたしぬ。一部分を  
心理学者の物産や地味を去る  
意思や、下等数学の助言によつて、  
解答要を譯して、上り、採るべき  
あつてはたしぬ。能率者は自己

その力丈で、一かう十末で判断をす、け  
う様々規摩をしなければならぬ。  
此の爲め、調査法は常識的、不慣れに  
近い、それ丈、學問的、才性、あるが、  
それ又、科学的、歴史的、よ、歪曲を  
され、このた、山の、あ、科学的、不慣れは  
其の眼鏡、とりかゝる、度、毎、に、定  
か、う、遠の、い、と、を、い、う、よ、

八、一七

フミョウキョーの  
ク、リー、ヤ、ミ、ト、の、格、に、精、神、的、交、流、の  
感、得、を、考、え、る、前、に、又、マル、ク、下、等、の、格、に

生産過程や生産組織の

ついでに、<sup>の</sup>都市に集まるとい

る地方の原料の山

と名の口内外にわたる

の商品の山の存在は

いよいよ、<sup>の</sup>都市に集まるとい

は都市に集まるとい

は都市に集まるとい

は都市に集まるとい

は都市に集まるとい

は都市に集まるとい

は都市に集まるとい

14. は都市に集まるとい



はく、中葉散すの客々人との

はめの節女にいついへ者へといふ

は家へこれよの才節 平しく候御事 一應

覚醒して見おすは充分に意味の

つすおあさり。右のいふれが心と心

の何かの作用に物着すのよしとす

はのまにあふ物といふと強さを

は系よしと是れを一度覚醒して

覚醒するは必要とあさり

美徳の徳が学が争ひついで

それのほろんな何人も認めなれ

は下へは事象的の徳をいふ成下

この頃の臨終は 解脱の  
 目標に  
 3. 死を必要の枯邊の第一級はこんな事  
 後の同様にPで、その必要は何人も  
 判断し  
 張られたものでなければならぬ。それ  
 が非科学的社会的なものである。

八二七

東洋大学「社会学部研究要」(2) P.1

天久照

○物と人との心の社会的交流組織

物の交流は原料・素材が都市の

工場に集まつて行く流れと都市の工

場から商売として消費者に分散し

て行く流れが主である。生産消費の間に流れる

都市の工場がそのまゝ商売は都

場の消費者を下互の生産者を送り

て行く場合もあるが工場は一括して都市

商人の手に廻る事も多し商人

消費者に取つぐ場合が最も多いが

消費者に取つぐ場合に最も多いが

消費者の手に廻る場合もある。最

初の都市商人より大規模の商人は

17

都市の大物は盛じて位置してそれらの

フレイトエラヤと従順銀成をしよう。

二枚半の何故かの商人の介下による

物価の昇降に對して消費者が組合

をつくり工場より直接仕方の生産を望

下中介業者の抵抗せざるも運賃

が既に久しとあつたものは当然である。

工場の産品が消費系の年は良

金の流れが金口にああよりいかなく解を

たつた銀成は都市のものの金口

散布とあつた銀成が金口にああより

を多く申さず一国民の一人として

これなくその組織の中に吸収する為の旨  
を合理的な配列の極に思ひぬ。これは  
京都を中心として都市が既得される  
「<sup>鐵道</sup>樞子」であらうが、今口には「<sup>商</sup>半」の養育  
を先急する。工場は首都におよびは限  
らない。けれど、現在その生産物は全  
口の普及をさばかたつて、組織の運に  
しらへて見ると、工場は北海道に昔から  
伊之末官をこころい、工場を先地にも  
て共々、販賣の場を十分知らむつ  
よ共々、販賣その他商業の活動の  
が部は東にあってその本が下

各政府の中核機関の活動と同じ様  
に府知以下の大力の各地行政機関  
を動かして金回りの及ぶその結果活  
動を促さんといふ

一 生産者の商売が長治本を維持  
的企業による生産をせねば行かんといふ

一 念し大量生産とあり念し高級行

中の位置とす大工場とあり、  
中核とす

一 財界に工場とすのり、  
中核とす

本部を東京にうつすにあり、行政

一 機関の全体的刷新と平修す。活節の

一 刷新とすにありといふ。

一任へは

若の地元の造り酒屋は一郡の中加

この原料の米を付下れ、その物

は作らるの郡内と著しくいふ

と同様不組織を半令出せ

この工業も主なる決り

警察も其首をそれか今日の活動

のたう首は行政組織より

この大崩れ経済的の故に

かへも想合本多の

加の如く商業や工業の

りよるにほまの活動が

あつた次第にして併し

云々曰かきまの行政活動は中央の政務

に民をその官位に何れ一人をたす

しるす必要あり組織にありて中央の政務

の指針を最大合理的

に何れ一人の民に及ぶもの組織に

民の俸給の地制の配列 官の上の作

か不交通の機關の合理的組織による

組織にありてしるす必要あり二つは中央が

以内の何れ一人の民に及ぶもの組織に

比連から最も必要あり命令が迅速なる

組織にありて二つは民がその命令に服

中央に立統しなり責任を遂行したる



より下の土着と通じて来た。左側から来た

近接する用事と通じて来た。左側から来た

である。下、上、右の他の部分から来た

行政近接は中央と東部を最も左に

的。この部分に結いこむ。路線は下

中央と東部へ。また、中央と東部への上

下の向。路線は下。統の団体の路線は

極。団体の路線は下。統の団体の路線は

町へ。河より東部へ。小部より大部

市へ。町と路線は下。町と路線は下

路線は下。町と路線は下。町と路線は下

路線は下。町と路線は下。町と路線は下

六つである。

構造

行政路線の形骸の爲には國本國の構造

を知り得るべきである。中央政府の構造

は人口の意匠に「境内の全地域が

其の中心である。都道府県の構造

は「支配する都道府県の全地域が

中心である。市町村の構造

は「全地域である。市町村の構造

は「商名が中心であり及ぶ村や集落の本質

は「商店の構造である。構造の本質

は「圏の構造である。圏の本質

は「地域の構造である。地域の構造

総て原料は下級原料より上級原料に  
 及び原料には首都まで昇るべく、然し昔  
 清人に至りて西に中都市ありてその工場を以て  
 清人に造る原料を生産するを以てその下級原料  
 造る一般に都市には上級原料より造られて来た  
 原料を以て原料に加工して組合と下級原料より  
 来た原料に加工して組合と下級原料より造る  
 原料を以て原料に加工して組合と下級原料より  
 造る原料に加工して組合と下級原料より  
 造る原料に加工して組合と下級原料より  
 造る原料に加工して組合と下級原料より

行政は国民の一人一人を以てその工業に流  
 して作るべき大なる商業活動には経済  
 行政の首領の判断によるべきと  
 行政の首領の判断によるべきと  
 行政の首領の判断によるべきと  
 行政の首領の判断によるべきと

中の人々を救済す

救済の要

理

轉任の若くは生活困難の輸送者少くはな

下あつたか、二下は者略す。

又<sup>経</sup>量より考へたう、工場に在るる原料

と工場で作出する商品の量と云ふ

大であらば、都市居住者の相対消費

了主合や菓茶類の都市入り荷量

更々大であらう、<sup>ケ月</sup>完全は<sup>カ</sup>自給物を失

り、<sup>ケ月</sup>秋の都市生活を<sup>カ</sup>一週間の交

通の遷移による死滅するにあらう

生活活動としての交通と生活活動としての交通が別けて考えらるべきである。

都市の外部にありし交通は、都市の内部にありし交通と異なり、その交通の目的は、都市の内部にありし交通の目的とは異なる。都市の内部にありし交通の目的は、都市の内部にありし交通の目的とは異なる。

都市の内部にありし交通は、都市の内部にありし交通の目的とは異なる。都市の内部にありし交通の目的は、都市の内部にありし交通の目的とは異なる。

都市の内部にありし交通は、都市の内部にありし交通の目的とは異なる。都市の内部にありし交通の目的は、都市の内部にありし交通の目的とは異なる。

都市の内部にありし交通は、都市の内部にありし交通の目的とは異なる。都市の内部にありし交通の目的は、都市の内部にありし交通の目的とは異なる。

路線

都市の内部にありし交通の目的とは異なる。都市の内部にありし交通の目的は、都市の内部にありし交通の目的とは異なる。

都市の内部にありし交通の目的とは異なる。都市の内部にありし交通の目的は、都市の内部にありし交通の目的とは異なる。

都市の内部にありし交通の目的とは異なる。都市の内部にありし交通の目的は、都市の内部にありし交通の目的とは異なる。

都市の内部にありし交通の目的とは異なる。都市の内部にありし交通の目的は、都市の内部にありし交通の目的とは異なる。

都市の内部にありし交通の目的とは異なる。都市の内部にありし交通の目的は、都市の内部にありし交通の目的とは異なる。

都市の内部にありし交通の目的とは異なる。都市の内部にありし交通の目的は、都市の内部にありし交通の目的とは異なる。

都市の内部にありし交通の目的とは異なる。都市の内部にありし交通の目的は、都市の内部にありし交通の目的とは異なる。

及ばず

◎ 移住の爲に公的移住

移住 定額日不支給の移動・出生の

為の移住が主 と息が 都市移住の利

用の為の都市用田居住者の都市移住の

や都市移住の人数増加に 用田の 休養都

市知用田を大きな人の減少である。

一般の人の交流の波においては、村落 より

都市への流は都市へより、移住利用

の 為 の生活活動 の 為の 下 都市 より

村落への流は移住利用 の 為の 公

人的移住が多い。人口の波は平常時

にあり、移住は都市へ、戦時にお

いては都市へ、戦時への傾向が見ら



α 生活活動と生活活動の別

β 都市内部外部に送られるものあり

都市部は送られるものあり  
都市部は送られるものあり  
都市部は送られるものあり  
都市部は送られるものあり  
都市部は送られるものあり  
都市部は送られるものあり  
都市部は送られるものあり  
都市部は送られるものあり  
都市部は送られるものあり  
都市部は送られるものあり

γ 都市部は送られるものあり  
都市部は送られるものあり  
都市部は送られるものあり  
都市部は送られるものあり  
都市部は送られるものあり  
都市部は送られるものあり  
都市部は送られるものあり  
都市部は送られるものあり  
都市部は送られるものあり  
都市部は送られるものあり

次に心の交流の形は人と人との直接の対面接觸におよび、身振りやまね

による立身立姿の傳達や情報の格段

より文字や比喩による地味な伝達

遠隔の人の間の活動送付利用

のそのマス・メディアの利用による遠隔

の文章や人間的な情報の送達

様々の形式がある

層位層階を線型化して送付する

才力とのあはれは心の交流

活動の場は如何なるべきかの

に先づき活動の場を如何にするか

30 送付と送達

送付と送達



①

生業教育は、その先元の中業がある。  
 今下は生業の教育は、学校と生業に  
 就いては、職場で受へる小のが、明治  
 業は、一家庭で父兄に教える中、  
 心の意味で教育過程に入念たす  
 はなく又人の生活下は生業教育大業  
 人との心の交流の中、昔も重業を思  
 程である。

文化は、生業文化は世代に  
 如何に継承されて来たか、又同様に  
 如何に傳承されて来たか、人の心

聖

日本中の不世為中の大なる変化は、  
 心知りしかた、素より、人なり、  
 と相通する、心知り、素より、人なり、

心の交流を、強固にして、  
 化用果や路線の不備、  
 はなく、心の交流を、強固にして、

下も交流路線を、  
 左、拒否し、  
 下も交流路線を、  
 左、拒否し、

31

この電演書の概略の中より重大な問題  
 下あり。現在には存在しおけよその組織  
 や活動の形ある。

これらも並に細目にする必要あり  
 つつと人同様の附外に急進しゆくた。

この二水は人同様に急進しゆくた。  
 故にあの加不事は急進しゆくた。  
 中門代と人同様に急進しゆくた。  
 急進しゆくた。相互に急進しゆくた。  
 急進しゆくた。相互に急進しゆくた。  
 急進しゆくた。相互に急進しゆくた。

急進しゆくた。相互に急進しゆくた。  
 急進しゆくた。相互に急進しゆくた。  
 急進しゆくた。相互に急進しゆくた。

急進しゆくた。相互に急進しゆくた。  
 急進しゆくた。相互に急進しゆくた。  
 急進しゆくた。相互に急進しゆくた。

山踏つてつよむ人とは急流し得る人の  
 てあり。

急進しゆくた。相互に急進しゆくた。  
 急進しゆくた。相互に急進しゆくた。

急進しゆくた。相互に急進しゆくた。  
 急進しゆくた。相互に急進しゆくた。

急進しゆくた。相互に急進しゆくた。  
 急進しゆくた。相互に急進しゆくた。

急進しゆくた。相互に急進しゆくた。  
 急進しゆくた。相互に急進しゆくた。

セクシナリスル。物室重花は之の基本原則とな  
 った。  
 この代向は知能の上は成者といふ素人同様の  
 成者。の事蹟大に針である。方と同様の  
 破滅の宿命を左の成者へ負荷してしま  
 ったのである。  
 昔は教育は生業に同するもの。生活の関  
 系も、あの山家庭で父兄より子弟任せられた  
 か。今も山家の一切の知能の担担を空  
 める物の任にある。といふ。

一人たるとよむ心強さ。百感せよ。を傳  
 へた。  
 心の交際の場合は、  
 下級互感より上級互感  
 へ向かふ。中東より地帯  
 へ向かふ。會話の便用を  
 及ぶ。場合は、多  
 くの場合は、  
 逆である。

① 三校前の巻へ

三九、九、四

都市化の問題

都市化の進行は、都市生活の質を向上させる  
とともに、社会的不平等を拡大する傾向がある。  
都市化の進展は、交通手段の発達、サービスの向上、  
文化の豊かさをもたらすが、同時に、格差の拡大、  
環境汚染、社会不安などの問題を生み出す。  
都市化の進展は、社会の発展と持続可能性の両方を  
確保するために、適切な政策と計画が必要である。  
都市化の進展は、社会の発展と持続可能性の両方を  
確保するために、適切な政策と計画が必要である。  
都市化の進展は、社会の発展と持続可能性の両方を  
確保するために、適切な政策と計画が必要である。  
都市化の進展は、社会の発展と持続可能性の両方を  
確保するために、適切な政策と計画が必要である。

味下小都系代作 歌集に比し、存はるる

強と同水準に達した。今口下は、

都系大歌集の都系並に、工集打

止歌集の都系並に、

政集代と云ふ、内定と都系代は、

オ、唐、集、の、コ、レ、カ、ハ、

前の勝と方者、代は、

系、の、代、り、

化の現物、

然し、

系、の、

及して、

「三カ」等々

理解 都市化の現象は次の様に理解  
すべきものと考えられる。

都市は社会的文化の交流の場としての  
機能の集積地である。農村地帯と比べて  
競争的機能の集中が著しく、村落  
に新しく競争的機能が出現し  
た時、漸次増大して行く。成長の過程  
に在りては、競争的機能を必要とする。こ  
の場合の都市化は次の様な  
現象形態が随伴して生ずる。  
従来而識者ばかりの社会生活に  
未知数の人々の参加が生ずる。

是れが第一の理由は、改革の

より、次に米利の人々同の社会

程は、<sup>社会的</sup> 运动的 団体 <sub>の</sub> 目的

本心 <sup>此の</sup> 動機 <sub>の</sub> あり <sup>かくの</sup> 如し <sub>の</sub> 社会

係が一般的である。 <sup>社会的な</sup> 地位

は是れが致す命不可及との故

諸事と都府をを加えて行く

過剰と都府何と稱する事本

出第とのぼ、この第一の随伴

ものよりのものであす、即ち

係の合然化が加はつて行く

係ととるべしとては得るべき

関係の組織は関係の性質上の分類が  
ほとんどすべてである。

文化の分化と年経して直結するもの  
文化の合衆化の中心の付着点に付く

と考へてみる。

文化関係のありと合衆化は直結の

関係のものも合衆化するものもある。

関係の組織も合衆化するものがある。

文化の分化と年経の分類の多量加

都多量と系して、その関係も多量加

関係である。



McHenry Adams 著 H. Pa. Bergstrom, D. C. Engstrom  
 共著の *Principles of Rural Urbanology*  
 1930 の中の主張をまとめた

- 一 農村型 農村型
- 一 職農 農村型
- 一 職農 農村型
- 一 農村型 農村型
- 一 人口の密度 低い
- 一 住民の学歴 低い
- 一 社会分化 及 成層 少ない
- 一 流部性 弱 (地質的・職業的) 大である
- 一 相互作用 人作人捨り

農村型より都市型への移行が都市化であるが、日本の場合では既述の都市型作用時により、農村型を意味する場合は多い。左の各項目より、農村型は個人主義化、自由主義化、合議主義化の外に、特に家族・住民主義化が意味を失っている。

第一講 中村、第二講 農業組合村、第三講 農村型

都市型  
 非農農の  
 人為的環境が  
 高度な大  
 密度大  
 農産的  
 都市的府大である

人作人捨り  
 (P.10 P.12)

町村合併と全口都市化

町村合併による山村の部落化

リート道をハス下田田町の工場地帯

の工場に通勤出来る様になる

一家の中の働き者は何かの職業

職場を得て現給料を得る田舎

町の百貨店で現代用品を買った

今の特を買った日たのぶの暮らさ

明るくして一杯は正に大都市

の近郊の生活が山村に及んだ

思はれる。

平坦部の農村でもハエの路線は

停車場を中心として八方向に向

田舎の電車が流れて三十分を  
行けば十人以上の都庁がある。

この都庁よりも余りともなく  
その出来の様にほら、田舎の  
と民衆をおかして、  
校と百化屋に其の力を結ぶ  
これ大衆の家、生活は大都市  
都のサキーマン、並の生活であらう。  
余り余りともなく都庁とその近  
郊と化してしまふのである。  
今では金田下を十分以内には都  
庁へ行かぬと多分ないところであらう。  
余りの都庁が日本の橋はすき回を  
散らし、その各は皆その橋に



1960年  
より

又 住宅の交通の便、物産の最近、  
 には整備され、首都大の品客の  
 申中都市までの路線や、物産の  
 だより申中都市までの路線、  
 や、物産の便、首都大の品客の  
 打、物産の便、首都大の品客の  
 あり、申中都市までの路線、  
 余り、申中都市までの路線、  
 可、物産の便、首都大の品客の  
 備、物産の便、首都大の品客の  
 大、物産の便、首都大の品客の  
 路、物産の便、首都大の品客の  
 運、物産の便、首都大の品客の  
 し、物産の便、首都大の品客の  
 ち、物産の便、首都大の品客の  
 幸、物産の便、首都大の品客の  
 條、物産の便、首都大の品客の  
 母、物産の便、首都大の品客の  
 る、物産の便、首都大の品客の  
 どん、物産の便、首都大の品客の  
 土、物産の便、首都大の品客の  
 の、物産の便、首都大の品客の  
 企、物産の便、首都大の品客の  
 ら、物産の便、首都大の品客の

マンの居住地並になつたのであふ。東京  
 は、昔サマリイマン並の生活になつたので  
 あふ。

京、物産の便、首都大の品客の  
 田、物産の便、首都大の品客の  
 なく、主人も、東京の機械化や、東京の  
 物、物産の便、首都大の品客の  
 口、物産の便、首都大の品客の  
 学、物産の便、首都大の品客の  
 然、物産の便、首都大の品客の  
 分、物産の便、首都大の品客の  
 方、物産の便、首都大の品客の  
 白化

の大勢

事によるものであすが、それ互に解なすめ  
こゝよ  
事よは政府の指導の方によりよるが、  
はるの  
の物概と、  
万史によるものと思はれり。

※ 吾日本のヒジロンの作製に最大の要  
件は日本国民の生活習慣、生きたま  
の操業となるものも早やくさかしま  
し、やがてである。これたしては如何  
なヒジロンも実現したものとほれん。

### 戦後の最大の文化

日本国民の戦前と戦後の最大の相違  
は直衣宗祿制のあったりとなくなつたであ  
らう。日本人の心の一面を表現する。人  
生観、生活習慣の大改革である。  
と云ふのである。これこそ最大の文化は  
明かでないところへ。社会学的に断言す  
る変化である。法衣着の降因縁のあ  
らへん民衆制になつたと平新口宗をたの  
む事を最大の文化と見てもいいが、戦前  
者の服は直衣宗祿制の文化を最大  
の文化と見ても可い。

十  
二  
病  
者

マニラの中心部華僑の神仏祭の日

- 1. 天公神 延生日 乙未年一月一日
- 2. 天公神 延生日 乙未年一月九日
- 3. 天公神 延生日 乙未年一月十五日
- 4. 天公神 延生日 乙未年二月三日
- 5. 天公神 延生日 乙未年二月十五日
- 6. 天公神 延生日 乙未年三月三日
- 7. 天公神 延生日 乙未年三月十九日
- 8. 天公神 延生日 乙未年三月十九日
- 9. 太子 延生日 乙未年四月八日
- 10. 太子 延生日 乙未年四月二十五日
- 11. 太子 延生日 乙未年五月十三日
- 12. 太子 延生日 乙未年六月六日
- 13. 慈悲心 延生日 乙未年六月十九日
- 14. 慈悲心 延生日 乙未年六月二十九日
- 15. 土地神 (鎮守神) 延生日 乙未年七月九日
- 16. 七聖夫人 延生日 乙未年七月七日
- 17. 花公花媽 (阿媽の花神) 延生日 乙未年七月七日
- 18. 魁星神 (北斗神) 延生日 乙未年七月十五日
- 19. 魁星神 (毛線佛) 延生日 乙未年七月十五日
- 20. 財神 延生日 乙未年八月八日
- 21. 司令官 延生日 乙未年八月八日
- 22. 八仙渡海 延生日 乙未年八月八日
- 23. 月神 延生日 乙未年八月八日

24 元天上帝昇天祭

25 仙公祭

26 火帝夫人祭

27 韓文公祭

28 元帥老爺祭

29 五穀老爺祭

30 法神上天祭

九月九日

九月九日

九月十五日

九月十五日

九月十五日

九月十五日

九月十五日

又次、秋の祭分、至る節、祭、活、是、三、秋、祭、と、是、の、  
全部、を、行、い、習、慣、と、す。

1 清明節 (墓祭)

2 端午節

3 土地爺祭 (大伯公、土地神) 六月二十九日

4 中元節

5 地爺可利祭

6 董月祭 (伊勢)

7 冬至 (先祖祭)

8 五穀老爺祭

9 釋迦成佛日

10 福寿節

三月

五月五日

七月十五日

七月十五日

八月十五日

十一月

十一月十四日

十二月八日

十二月十九日